

Title	昭和61年度岩見沢分校卒業論文等概要
Author(s)	
Citation	年報いわみざわ : 初等教育・教師教育研究, 8: 96-101
Issue Date	1987-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8501
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

昭和61年度 岩見沢分校卒業論文等概要

「学校」教育系

教 育 論文は13編。「義務教育における無償制度」、「学校事故」、「児童憲章」を扱った教育制度・行政研究、「日本人の子ども観（近世）」、「空知教育会」、「戦後教育改革」を扱った日本教育史研究、「ペスタロッチ」、「共存感覚の現代的危機」、「子どもの主体性・自主性」を扱った教育哲学研究、また「考えることの教育」を扱った授業論、「教師の力量」を扱った教師論、「子どもの人格形成に及ぼす家庭の役割」を扱った家庭教育論、さらには「視聴覚教育の研究」と、論文のテーマ・内容はバラエティに富んでいる。出来、不出来はあるものの、概して努力の跡が見られ、短い期間でのまとめとしては妥当なところであろうと思われる。次年度は、論文へのいまま少し早い取り組みが望まれる。

教育心理 以下の論文11編が提出された。「乳幼児における自然概念の構造およびその獲得に関する研究」「文学教材における児童の思考過程に関する研究—大造じいさんとがんの授業分析から—」「児童の文学作品の理解に関する研究—視点変換を中心として—」「授業場面における説明文教材の理解過程に関する研究」「個人レベルの指導論（Personal Teaching Theory）—小学校教師および教育大生を対象として—」「対人魅力に関する研究—開示条件の分析を中心として—」「物語構造の獲得に関する発達的研究」「援助行動に影響を及ぼす要因に関する研究」「子どもの生活と遊びに関する生態学的研究—子どもの遊びを見直す立場から—」「多元的な個人空間における性とパーソナリティに関する研究」「社会科教育におけるより能動的な獲得知識の活用に関する心理学的研究」意欲的な研究が多かった。

「言語」教育系

国 語 現代文学5、古典文学3、国語学1、児童文学1、リズム論に関するもの1、民謡に関するもの1、計12編が提出された。それらのうち次の3編に意欲的な姿勢がうかがえた。『リズム論の現在と中原中也』は日本語におけるリズムを多面にわたり追求し、中也節の特徴を破格な拍数を挿入する独特なリズム（乱れによるバランス）にあると考察している。『八島太郎論』は全米に著名な児童文学者がなぜ祖国日本で無名に等しいかを、留学中に収集した豊富な資料を駆使して論述している。『開高健論—初期作品の研究—』は初期の問題意識を捉えることが、その後の開高作品と多様な行動的側面の理解につながることを力説している。各編真摯な取り組みはみられるが、準備不足は否めず、独自の視点をもって論ずるまでに到っていないものが目につく。また、例年同様、誤字脱字・原稿用紙の使い方など初歩的語謬も解消されていない。

書 写

- 中国書道史における鐘繇の位置～漢代から六朝への過渡期において、鐘繇の書が果たした役割についての研究。
- “哀冊、についての研究～褚遂良書“哀冊、における造形・用筆法を、褚遂良の他の作品や王羲之の作品と比較・研究し“哀冊、の持つ書的特徴の考察。
- 六朝時代の書についての一考察～六朝時代の書の起源、発展、南朝と北朝の書風の相違を比較研究し、六朝時代の書の中国書道史に占め

る位置を考察する。

- ・顔真卿の書についての一所見～顔真卿の生涯、諸作品の書風や用筆法、唐代の作家との書風の相違を比較研究することにより、顔真卿の書の特色を考察する。

外国語 今年度提出された卒業論文は、英文学3、アメリカ文学3、英語学2、教授法1の9編であった。アイロニーや風刺から作品を分析したもの、女性問題を視点においたもの、アメリカの現代作家の作品のテーマや技法を映画と比較して論じたもの、和製英語の研究、感情表現の研究など多岐にわたった。全般的には、研究方向としての水準は高かったが、表現としては粗雑なものがいくつかあり、練れた英文を書けるよう一層の努力が望まれる。

「社会」教育系

歴史 日本史関係では、近世一鎖国を17世紀、東アジアにまで進出して来たヨーロッパ諸国との関係を織りこんだ新しい国際関係として検討したもの、近代一明治初年の「脱隊騒動」の性格を、その民衆性の部分に注意して論じたもの、現代一太平洋戦争期の日ソ関係を、日本の北進論、南進論、ソ連の対日参戦を中心に考えたもの、の3本である。

世界史の領域では、「戦争論一戦争阻止と平和」、「グロチウスにみる平和」、「飢えに関する諸問題」の3編が提出された。いずれもその論点が「戦争」と「平和」にかかわるものであるため、「平和に関する考察」として共同研究の体裁をとった。

地理 今年度も従来の研究室の方針どおり、一地域の地誌を共同作業によりまとめあげるという方向をとった。本年度の卒業生は3名であり、対象地域は江別市が選ばれた。同市は従来も卒論のフィールドとして、いく度かとりあげられたもので、今回は札幌市の通勤圏にある本市の住宅地域としての発展状況と、商店街や地場産業等の変容ぶりが研究の課題となった。江別・野幌・大麻の三地区について論じられ、企業城下町としての江別地区の変化、北海道最初の屯田兵村としての江別・野幌両兵村の変貌ぶり、地場産業としてのレンガ産業の現況、大麻地区における団地と文教施設の発展状況などが述べられている。現地調査の不足は毎度のことと、共同研究に対する各自の責任への理解の浅さなど問題も多く、本研究室の卒論作製方法に再検討が必要な時期にきているようである。

法 政 法律

「国会と日本国憲法」「現代日本の妻の地位」「治療処分」

以上いずれも、法的乃至制度的沿革について考察し、現在に於ける法的問題について、必要な項目を設けて考究し、あわせて今後の問題点につき論じたものである。

政治

「政治意識の形成過程についての一考察」「選挙制度の改革」

以上二者とも、北海道大学荒木教官の懇切なご指導によるものであり、資料の整序、調査分析等に基づいて論じたものである。

社 経 社会学関係での今年度の提出は二編のみであった。「現代日本の福祉とその思想」をテーマとするものは、内外の制度・思想の歴史的整理をふまえたもので、とくに「社会に役立つ」という観念をめぐっての福祉思想の分析は有益であった。「平和の概念と意識の変化」を主題とするものも、近年の「平和研究」の成果に立脚して、恒久平和実現

のための課題と条件に説き及び、興味深いものであった。

経済学の卒業論文の多くは例年通り経済政策特に国際経済問題を中心にしたもので、4人のうち1人が金本位制度の歴史的発展とその過程の中で金の流出・流入の為替相場のレートの変化を数理分析したもので、国際経済では貿易摩擦の中心である、自動車産業と電子部門技術産業についての現状分析と、対米対ECについての問題解決が主要で他の部分では貿易摩擦による中小企業の現状の自立対策について分析したものである。

哲 倫 従来通り哲倫はかなり自由なテーマを選んでいる。内容も言語学（ソシュール）、音楽（バッハ）、詩学（アンドレブルトン）、哲学（ヴィットゲンシュタイン）、同（ベルクソン）それに日本文化論（ベネディクト）と広範囲にわたっている。そのためテーマによっては哲倫以外の先生方にも実質的な御指導をお願い致しました。

社会科教育 学生の問題関心を重視しているため、本年度は社会科教育に直接かかわるテーマはなかったが、3編が提出された。「戦後社会における子どもの遊びの変容について」―戦後の子どもの遊びの変遷を、名称・場所・時間・集団の4つの視点から具体的にあきらかにした。それにより、遊びの転換期は、1960年代初期、1969年頃、1977年頃の3つの時期にあるとし、変化の要因を産業構造の激変、工業生産の増大（とくにテレビ、石油化学製品）、農村から都市への人口移動とそれに伴う家族関係の変化等の社会的背景と関連づけて論じている。多種多様な資料と統計を駆使した分析は、高く評価できる。「北海道の縄文期の墳墓についての考察」―近年注目されている区画墓の位置づけをねらったが、考古学の理論・実践を欠くため苦心した。「旧札幌村玉葱販売組合変遷史」―地域学習教材づくりの基礎的研究である。

「自然」教育系

算 数 幾何学ゼミナール：3次元ユークリッド空間での空間曲線、平面の種々の曲線の微分幾何の手法による特性研究を主とし、続けて曲面上の曲線の特別な場合もまた空間曲線として扱い具体的な幾何学的図形を素材としたゼミを行なった。統計学ゼミナール：今年は学生4名と共に情報理論のエントロピーを中心に輪講した。レポーターが風邪で出来なかったりして、文献の最後まで行かなかったが、通信伝達に関する問題に情報理論を応用する所まで達した。解析学ゼミナール：4年間学んだ数学の総合的な演習として、位相幾何の入門書（松本幸夫著、岩波書店）を輪読形式で学んだ。数学教育ゼミナール：提出された論文の内容は、「操作的活動」「図形概念の形成」「数学教育における言語の意義」及び「Slow Learner に対する文章題の指導」で、各々積極的に取り組んだ。発表会でもその独創性が評価された。

物 理 ヨーロッパに最初に自然科学雑誌“Philosophical Transactions of Royal Society of London”が発行されたのは1665年であることから物理学の歴史は大体この時代に始まったと見てよい。この時代に天動説から地動説へと動かしがたい自然の姿を捉えさせたのは、自然を正確に観察し、その結果を系統的に整理することにより自然の法則性を発見したことに基づいている。研究室はこの意味で自然観察に主眼を置き、1部で「空気中での落下運動」2部では天然の帯電粒子を測定するための計器の開発と測定としてテーマ「氷の剝離粒子の電気的性質」を取り上げ、帯電符号が外気温に支配されることを見出した。又、3部では生活に密着したテーマとして公害を取り上げ「降雪の酸性度及び電気伝導度」の観察測定を行い、札幌市の場合、都心部より12km以上離れた地区

では酸性度が5以下になることが判った。

化 学 今年度も、ユリ科およびその近縁植物に含まれる遊離アミノ酸と未確認ニンヒドリン陽性物質の薄層クロマトグラフィーによる分析が行われた。主な成果は、エゾカンゾウの2つの未確認ニンヒドリン陽性物質が、オキシグルタミン酸とそのアミドと推定できる結果が得られたこと、バイケイソウのトリプトファンが同定されたこと、オオアマドコロについて、AZA関連物質の単離が試みられたことである。また、当研究室には、今迄に多くの植物についてデータが蓄積されているので、それらをコンピューター処理する試みが行われた。その他に、数種の植物から、カルシウム結合蛋白質—カルモデュリンを調製し、システイン残基等についての比較と、薄層クロマトグラフィーによるアミノ酸とイミノ酸の定量法の検討が行われた。実験にもう少し時間をかければ、より確かな結果が得られたと思われるものが多かった。

生 物 「東山地域における野鳥の生態調査及び岩見沢周辺の水鳥飛来状況」（滝泰英・矢持達也）は1977以来5回目の調査であり、道央自動車道の建設工事の影響を調査するのが主な目的である。結果として10種近くの鳥が従来の調査結果と入れ替わっており、工事の影響と考えられる。「サケの肝臓形成と periblast」（河合智之・中村実美）は受精後12日目から24日目までの胚について肝臓の形成と、肝臓形成期における periblast の行動をハイデンハインのアザン染色原法によって組織学的に検討した結果 periblast の関与を確認した。「アクチナストルムの生育に関する基礎的研究」（木原真由美・小玉裕久・島本昌子）は緑藻類のこの種を培養し、分裂・生長と光周期の関係を調べた。その結果この細胞は同調性のある培養では暗期に分裂すること、また明暗周期を中断して、明期のみ暗期のみにした時分裂が一時停滞することが解った。

地 学 例年通り野外調査と室内実験のデータを基礎に卒論を作成した。フィールドとして今年度は栗山町南方の夕張川およびその東方の山地を対象とした。特にこの地域に分布する新第三紀川端層の単層レベルでの層序対比と礫岩層中の礫の供給源の推定を主要目的とした。結論的には、川端層の膨大な量の礫は、中新世中半に北東方向からの流れ（パレオカレント）によりもたらされたことが判明した。この結果は、本年度調査域の北方に位置する昭和59年度卒論地域の調査結果とも矛盾はなかった。その他、第四系の分布と層序に関しても新知見を得た。

「芸術」教育系

音 楽 音楽では、次の11編が提出された。

1. 子どものピアノ学習とその指導
2. 音楽教育における基礎能力指導について
3. 音楽教育における創造性の育成
4. 中学生の課外活動における合唱指導
5. リズムについての一考察（リズム教育にむけて）
6. 教育学に基づいたスクールバンドの指導について
7. ドビュッシー（水の上の反映）の演奏解釈
8. 障害児（精神薄弱児）における音楽教育
9. 小学校における歌唱指導についての一考察
10. リズムと知覚— phrasing についての一考察

11. 初等ピアノ教育における即興演奏力の育成

図 工 絵画は油彩3名版画1名、テーマは油彩では人物2名静物1名でそれぞれ百号2点。版画は多色銅版による風景。彫塑は塑像2名立体造形2名、テーマは塑像を木彫による等身の人物像、立体造形はガラスとひもによる構成作品と黒陶によるオブジェ。工芸は木による造形3名、テーマは歯車を使った遊具的なオブジェ、視覚心理学的な造形要素を作品化した立体、ガウディからヒントを得た立体。美術科教育は論文と制作2名、論文テーマは美術の始まりについて考察した始源の造形、大脳生理学の立場から教育と人間を考察したもの、作品はシルクスクリーン及びドゥローイング。以上12名による作品と論文である。具象、抽象、論文とも、美術や教育における今日的な問題とそれぞれどこかで関わりながら各々自分なりの表現が追求されていたと思われる。

「生活・健康」教育系

体 育 本年度提出された論文は8編であり例年どおり各研究室の研究方向を反映したものであった。スキーに関する論文はターン時の動作分析と、小学校のスキー授業を調査研究し指導バリエーションを展開したものであった。力学関係では垂直跳びで2種類の跳躍方法の有効性を考察されている。もう1編は床運動における前方宙返りを身体各部位の運動方向をとらえることにより、その練習法に接近するものであった。生理学分野のものは歩行動作における反射性と随意性の分析と、筋の持久力トレーニング効果について扱ったものである。又、心理学的側面からはスポーツ集団のリーダーに対し、リーダーシップ訓練効果の測定をしたものが2編あった。本年度の学生は意欲的に卒論に取り組み、内容的にも検討を重ねた論文が多かった。

技 術 昭和61年度は、工学分野では、工作機械及び溶接、切断と機械の設計を学習するために、実用的な木工旋盤と彫刻刃砥ぎ器の設計製作をさせた。
農学分野では昨年引き続き岩見沢市内の石碑の現地調査、寺院を中心に、一部公園を対象にして蒐集記録を行い、教育的意義の考察を検討する。
電気分野ではBASICによる技術科「電気」教材の作成に取り組んだ。特に電気理論に対する生徒の興味付けに視点を置き、グラフィックを多く取り入れた内容となっている。

家 庭 エネルギー代謝に関する実験としては、精神活動時、走行時の至適速度及び斜面歩行時の代謝量を中心に、被験者各々の条件等について新しい角度からの検討が行われた。
また、牛乳や大豆・大豆加工品について、理論的な考察と共に摂取実態と摂取意識とのかかわり等から、食生活の問題点と改善の方向について具体的な提言がなされた。実験としては、ポテトチップスの酸化度の測定と風味調査との対応が示された。
衣生活関係では、快適な睡眠と寝床条件の観点から、敷布団の性能について実証的な取り組みがなされた。さらに、家庭科教育のあり方についての考察をふまえて、衣生活教育教材の意欲的な試案が報告された。
全体的に、それなりのまとめは一応していると思われるが、一層の深化が課題といえよう。

総合教育 本年度の論文は、「北海道の獅子舞—その特徴と今後の展望—」「小学校社会科における歴史教育の実践研究」「円山動物園で学ぶ進化」「川を視点とした地域教材(案)—伏古

川と大友堀一」「平和教育—その研究・実践と課題—」「子どもが生きる授業をめざして」「大村はまに学ぶ」「人格の形成としての学力」「1人ひとりを生かす教育—人間理解を根本にすえて—」の9編である。テーマにみられるように、教科教育についての教材化研究を中心としたもの、教育現象の底にあるものとのらえに関するもの、すぐれた実践にどう学ぶかなど多岐にわたった。論文には、これまで無造作に前提としてきたものへの鋭い疑念から出発しようとしたもの、直接現地での調査や資料に執拗に当たったもの、また、個性あるなまのものへの洞察を試みようとする姿勢がみられるものなど、好ましい方向のうかがわれるものもあった。